

大念仏寺本鈔写毛詩傳私攷

内野 熊 一 郎

一
大念仏寺藏鈔写毛詩伝殘卷影本は、京大文学部影印第十帙（昭和十七年刊）に収められてをり、享益する所多大である。但それが、何時頃、誰人に抄写されたものか、如何なる経過を辿つて今日に残存してゐるのか、又手詠伝授した人は、如何なる学系の人達であるのか、などは尙未詳であり、之が探究は行はるべき第一作業である。が此の詳察は後日にゆづり、今はその極く一端を考へておくなら、清原・大江家本ではなく、然もやはり一家相伝の抄本である、と推考される。それは、羔羊篇の「訓詁書入レ」に、「羔羊之皮^{カハコロモ}」とあり、「カハコロモ」は念仏寺本の訓み方で、「カハアリ^{カハアリ}」は清原本の訓らしいのである。事実、宣賢本には、ことを「^{カハコロモアリ}皮^{カハアリ}」とよんでゐる。即ち「カハアリ」は清原家のよみ方で、尙ほ「カハコロモアリ」とよむ江家点を参考に書入れてゐるのである。故に、念仏寺本は清・江二家本とは異なるものであることが判る。然も亦、蠡斯篇に書入レたもので、「子孫蟄々^{シシシシ}兮尺十反、師説音直立反」と。これは釈文音を書入レたもので、それには、「尺十反、徐又直立反」とあるから、「尺十反」は釈文音切であり、師説音は徐音を用ひたものである。即ち師説音とは、念仏寺本写誦者の先師家説であり、釈文正音にはよらず、徐音によつたことが判る。かくて此の抄本も、未詳ではあるが、ともかく或る一師相伝の一家説本とは推せる。而して文献上我国平安初期には、この系統の毛詩本が行はれたに違ひないことは、本朝文粹に、小野篁の「所謂君子好仇^ウ」と言はれるものが存してをり、「好仇」は詩閼睢篇の句

であらうが、普通一般の毛詩本には「好逑」となつてゐるもの。「好仇」に作るのは、釈文一本に見える句形で、且大念仏寺本も同じである。故に、我国古代平安初期には、この系統の毛詩本も、たしかに用ひられてゐた、と推定されるのである。

さて抄本の書法字体については、やはり和風があり、我国人の手写になると想はれるが、その本文の傍側には異本と校合した細字の書入れがあり、更に注目すべきは、釈文に基く音注の書入れもあることである。当時我國に流伝してゐた釈文の古い型の真相も、或る程度まで想見することが出来るし、卷頭大序の下欄外には、「正義曰」の書入れも存し、抄写後、正義と校合したことも判るのである。

が、今は先づ、大念仏寺本毛詩伝の字句形が、如何なる性質なり、系統なりを、保持してゐるかの方面について、究明して見たい。

之が為に、大念仏寺本と、京大藏清原宣賢抄本と、詩正義本と、釈文正本並に一本（四部叢刊）と、正義所引顔師古定本・俗本・崔靈恩集注本と、の比較表を作つて見よう。但し念仏寺本は、巻首から召南標有梅篇までの残卷であるから、それだけの部分についての、主要な例百五十九条・附①一条に關して、比較表示を試みよう。

（表中、大念仏寺本の詩字句に同致のものは、○印であらはした。）

31 化天下以婦道	○	因葛之性以興焉	○	灌木叢木也	同上	○	正成天下 正義ニヨレバ
32 因葛之性以興焉	○	服之無歎	同上	灌木叢木也	同上	○	灌木叢木也
33 灌木叢木也	○	王后親織：公侯夫人紵綌：	同上	王后織：公侯夫人紵綌	同上	○	○
34 服之無歎	○	○	同上	○	同上	○	○
附1 王后親織：公侯夫人紵綌：	○	○	同上	○	同上	○	○
35 謂嫁曰婦	○	○	同上	○	同上	○	○
36 曷常曷否	○	○	同上	○	同上	○	○
37 我、我使臣也、	○	○	同上	○	同上	○	○
38 為意不盡、申慫慫也	○	○	同上	○	同上	○	○
39 陟彼祖矣	○	○	同上	○	同上	○	○
40 我僕痛矣	○	○	同上	○	同上	○	○
41 我僕痛矣	○	○	同上	○	同上	○	○
42 痛亦病也	○	○	同上	○	同上	○	○
43 樛木（樛木）	○	○	同上	○	同上	○	○
44 無嫉妬之心也	○	○	同上	○	同上	○	○
45 序の鄭注ナシ	○	○	同上	○	同上	○	○
46 葛藟	○	○	同上	○	同上	○	○
47 后妃妾以礼義相与和	○	○	同上	○	同上	○	○
48 申慫慫意也	○	○	同上	○	同上	○	○
49 縈之	○	○	同上	○	同上	○	○
50 衆斯	○	○	同上	○	同上	○	○
51 唯蛇蟠不尔耳	○	○	同上	○	同上	○	○
52 桃夭	○	○	同上	○	同上	○	○
53 無繇民焉	○	○	同上	○	同上	○	○
54 菑畀	○	○	同上	○	同上	○	○
55 揅之打打	○	○	同上	○	同上	○	○
56 打打揅揅声	○	○	同上	○	同上	○	○
57 起武夫	○	○	同上	○	同上	○	○
58 皆所以禦此難也	○	○	同上	○	同上	○	○
59 此菑畀之人賢者也	○	○	同上	○	同上	○	○
60 有武力、任、為、將、帥、之、德、也	○	○	同上	○	同上	○	○
61 諸侯可任以國守：折衝禦難於未	○	○	同上	○	同上	○	○

然之也 本无	62 此豎夷之人敵國有來侵伐者	63 於行侵伐之可以為策謀之臣、使	64 宋政	65 和平、天下和、政教平也、	66 和平、天下和、政教平也、	67 宋政	68 宋政馬寫	69 宜懷任焉、	70 擯之	71 先受文王之教化也、	72 橋木	73 休息	74 遊女	75 諭女雖出遊於流水之上、	76 犯礼而往、將不至、焉之也、	77 言艾其楚	78 尤高繫者也、	79 婦人能閱其君子、	80 愁如調飢	81 既見君子、君子反、於已反也、	82 故下章而勉之、	83 如魚勞尾赤也、	84 避此勤勞之處	85 当念思之以免於害、	86 麟之止
此豎夷之人敵國有來侵伐者	於行侵伐事、用為策謀之臣	宋政	宋政	和平、	和平、天下和、政教平也、	宋政馬寫	宋政馬寫	擯之	先受文王之教化、	橋木、	休息、	遊女	諭賢女雖出遊漢水、	將不至也、	言刈其楚、	尤高繫者、	婦人能閱其君子、	愁如調飢	已見君子反也、于已反也、	故下章而勉之、	如魚勞則尾赤也、	辟此……	当念之以免於害、	麟之趾	
同上	於行政伐、可用為……	同上	同上	和平、	同上	同上	同上	同上	同上	先被文王之教化、	同上	同上	同上	諭賢女雖出遊漢水、	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	

112 供衣服、	111 治糸繭、	110 供祭祀矣、	109 薇草也、 <small>菜本</small>	108 蕨藺也、	107 阜螽蟊也、	106 草虫	105 祭事畢、夫人祓祭服而去、髮髻也、	104 龍倦	103 髮髻	102 夙夜、 <small>夙本</small>	101 濯濯、 <small>濯本</small>	100 采繁	99 方有之也、	98 送迎百乘、	97 百兩御之	96 冬至祭之	95 乃可以配人君、 <small>君子也本</small>	94 如鴈鳩	93 象有武而不用也、	92 定題也、 <small>姓本</small>	91 振振公性、	90 有似於麟之時也、	89 無以過也、 <small>本无</small>	88 君子宗族、	87 信厚如麟趾之時也、 <small>此指本</small>
共衣服、	治絲繭、	共祭祀矣、	薇菜也、	○	阜螽蟊也、	草虫	： 祓祭服、而去髮髻、	○	髮髻、	夙夜、	濯濯、	○	○	送御皆百乘也、	： 御之、	○	乃可以配(国君)焉、	○	示有武而不用也、	○	： 公姓、	有似麟志之時、	無以過也、	君之宗族、	信厚如麟趾之時也、
同上	同上	同上	同上	蕨藺也、	阜螽蟊也	同上	同上	○	○	同上	同上	○	○	同上	同上	冬至加功	同上	○	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
同上	同上	同上	薇草也	蕨藺也	同上	同上	○	○	同上	同上	同上	○	○	同上	同上	○	○	如尸鳩	○	○	○	○	○	○	○
○	治絲繭	○	○	： 薇也	草虫	○	髮髻(無去字)	髮髻	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
					阜螽蟊		髮髻(無去字)	髮髻								冬至加功									
					○			髮髻								冬至加功									

劉昌宗・周說
本(冬至加之)

113 女子十年不出門、
 114 傳姆教婉婉
 115 女十有五而笄、
 116 蘋大萍也、
 117 浜涯也、
 118 薰蘋藻者火於魚潛之中
 119 有足曰鎡無足曰釜
 120 錡美之髦也、
 121 有齊季女、
 122 齊敬也、
 123 女將行嫁父體之以俟迎者、
 124 祭礼主婦設饗、
 125 其粢盛、
 126 簋云芡草舍也、
 127 邵伯所餽
 128 邵伯所稅
 129 厭挹行露、
 130 夙早也、夜暮、
 131 礼不足而強來、
 132 雀之穿屋、
 133 獄訟也、
 134 人皆謂雀之穿屋似有角者、
 135 不以角乃以喙
 136 純帛不過五兩、
 137 室家之道不足、

○	傳姆教以婉婉、	女子十年不出、	姆教婉婉	○	……塹也
	十有五而笄、	同上	同上		
	蘋大萍也、	同上(?)	同上		
	浜涯也、	同上	○	……厓也	
	……者、於魚潛之中、	同上	……? …?	……? …?	
○	……羹之髦也、	同上	同上	餽……	有足曰鎡
	有齊……	同上	同上	○	○
	齊敬也、	同上	同上	○	……父體之而……
○	女將行、父礼之而俟迎者	同上			
○	……	同上	其粢盛	其粢盛	
……芡……	……	同上	同上		芡草舍也
……	召伯所餽、	同上	召伯所餽	召伯所餽	
……	召伯所稅、	同上	同上	召伯所稅	
……	厭挹……	同上	同上	厭挹……	
……	夙早也、	同上	夙早也、夜暮	○	
……	……彊來、	同上	同上		
○	……	同上	○	雀之穿屋	
……塹也	……	同上	同上		
○	……乃以喙	同上	……乃以喙		
○	……	同上	……		
○	室家不足、	「同上」也	絺帛……	絺帛……	

111

然る時、大念仏寺本の詩字句と同致若くは異動する諸本の状態を、主要字句百六十条に就て験すれば、大念仏寺本と同致するものは、

56 条	150	132	108	92	71	53	39	21	2	宣 賢 本
	151	134	113	94	(?)	(?)	41	25	3	
	152	136	119	96	73	58	42	29	6	
	154	141	120	99	74	(?)	43	31	8	
	156	146	124	100	78	65	49	33	10	
	147	125	104	79	69	51	35	15	15	
	148	126	107	82		(?)	37	19		
49 条	148	126	103	79	49	43	31	24	2	正 義 本
	150	132	104	82	53	45	35	(?)	3	
	151	134	117	92	(?)	(?)	37	25	6	
	152	136	119	94	69	47	39	23	8	
	154	146	120	99	73	(?)	41	30	19	
	156	147	124	100	74		42	(?)	21	
31 条	148	126	104	96	73	43	8	1	釈文正本	
	150	132	109	99	75	45	21	2		
	151	144	117	100	(?)	54	29	3		
	156	147	120	103	92	60	41	6		
38 条	157	127	118	98	86	64	46	39	23	釈文一本
	(?)	(?)	106	(?)	70	(?)	40	(?)	11	
	129	121	110	93	72	49	42	25	16	
	130	122	112	94	79	53	45	28	17	
	149	125	116	97		(?)	34	17	20	
12 条				109	92	31	8	1	定本	
					105	44	13	2		
					(?)	71	19	6		
12 条				附①	114	38	15	4	俗本	
					(?)	103	22	7		
					119	107	33	12		
2 条								5	崔本	
								154		

の如くであり、この外のもはそれと異動があるのである

而して、この中、宣賢本と正義本とは、大部的に、念仏寺本百六十条に相当する字句例を備へてゐるのであるが、その他の諸本は悉く備存するものではなく、存しないところがあるもの。故に、相当する字句例の存具しないものは控除して、存具するものだけで、同致例の比率を考へてみるのが、妥当であらう。然りとすれば、釈文正本の比率を全数は、百条、釈文一本は八十条、定本は卅六条、俗本は廿一条、崔本は五条である。従つて、宣賢本が念仏寺本と同致する率は56/160で、約三五%、正義本は38/160で、三〇%、釈文正本は31/100で、

三一%、釈文一本は $\frac{36}{80}$ で、四一・二五%、定本は $\frac{12}{37}$ で、三二・四八%、俗本は $\frac{12}{21}$ で、五七・一四%、崔本は $\frac{2}{5}$ で、四〇%、といふことになる。即ち大念仏寺本は、恐らく釈文正本や正義本の系統ではなく、釈文一本や崔靈恩集注本特に正義に所謂俗本の系統に属するもの、と推定されようか、或は此れは又、南北朝の南学系伝本に出るものかも知れない。

[Home](#)
[About](#)
[Contact](#)

次に、念仏寺本と諸本との異同關係を、質的に若干検討してみる。

(1) 先づ俗本について。④の如きは、定本・釈文正本・正義本は皆「所以風天下」に作り、俗本だけが「所以風化天下」になつてをり、念仏寺本は之に同じである。而して正義では、「俗本有化字、誤也、」と校定する。正義本によつたものなら、誤りとする形に従ふことはしないであらう。念仏寺本が、正義本によらず、その祖本の一であつた俗本に系統することの一証である。同じ例は、(7)「詠歌之不足、故不知」、(15)「足以自戒王政之所由廢興也」、(22)「荇菜接余也(附1)」「王后親織玄紬、公侯夫人織紵纈」、(38)「申嚴勸也」、(107)「皇蠡鑿蠡也、」の如きに於ても見られ、此等も正義中では皆「非也」とか「誤衍也」とされてゐるもの。然も此の誤衍視され俗視される形を、念仏寺本がわざ／＼存してゐるのであるから、正義本には拠らず、もと／＼俗本系の毛伝本が我國古代に流入してゐて、それに出たものか、と推定できる所以である。

(Ⅱ) 更に、釈文一本字句形についても、略同様のことが言はれると思ふ。即ち(11)「風刺上、(14)「哀刑政之荷、(16)「騶虞之德、(20)「君子好仇、(28)「葛藟、(34)「服之無斂、(64)「芣苢、(70)「擗之、(72)「橋木、(93)「象有武而不用也、(97)「百兩御之、(98)「送迎百乘、(106)「草虫、(116)「蘋大萍也、(119)「烹蘋藻、(121)「有齋季女、(122)「齋敬也、(127)「邵伯所暵、(129)「厭摠行露、(130)「夙旱也、夜

暮。(149)「殷其雷」(157)「此夏鵲晚」の如きは、諸本の中釈文一本だけが、かやうに作って念仏寺本と同致である。故に、恐らく念仏寺本は、釈文にいふ一本系統に出たものであらう。然も右例の中、(106)「草虫」の如きは、釈文に「本或作虫。非也」と否認されてゐる。虫の形に従ひ存するのであるから、釈文を依拠にし其の一本の形に従つて字を改めたもの(もしさうだとすれば、誤視されてゐる字形を存することとはしない)ではあるまい。釈文にいふ一本系統の底本が我国古代に伝はり、それを祖本にして念仏寺本が抄写されたものと推される。而して、釈文一本と正義の所謂俗本とは、釈文正本に非ざる当時通俗の流行本の幾つかであるべく、同一物ではないが、共通点も有つもの、と推されようか。

(Ⅲ) 宣賢本について。尚又、(10)「移風易俗」(65)「天下和平」(78)「尤高潔者也」(108)「蕨蠃也」(113)「女子十年不出門」(141)「相功化」の如きは、諸本皆異なり、唯宣賢本のみが之に同致である。蓋し宣賢本は多く正義本に拠つて改めてゐるが、尚このやうに、我國古伝本の相を伝存するところもあつたと見るべく、それは又念仏寺本に固存伝承される釈文一本・俗本系の古い一形とも考へられる。

(Ⅳ) 崔本・定本について。(5)「風賦也」(154)「箋云、何乎此君子」：「は崔本と念仏寺本とのみが同致する。蓋し崔本など南学系のものに念仏寺本は多く連関があつた。又(13)「礼義廢」(14)「無嫉妬之心也」(71)「先受文王之教化」(109)「薇草也」(123)「父醴之」などは定本のみ合致する。蓋し定本は、顔師古が亦多く南学に基き採る所のあるもの。故に念仏寺本と合致する此等のものは、恐らく念仏寺本が南学系通俗本に出るが故の符同と察せられる。特に(71)「先受文王」の如きは、宣賢本も同じだから、我國古伝本にはかく作つたに違ひなく、念仏寺本系の祖本から「先受」だつたので、定本によって改めたのではなからう。

(Ⅴ) 釈文正本・正義本との関係。然るに、念仏寺本と雖も、勿論、釈文正本や時には正義等によって、伝写の際に、改写される所がなかつた、とは言へない。(51)「唯蜺蟺不介耳」の如きは、宣賢本「不介」に作れば、我國古伝本には「不介」に作られたと推されるが、正義本・釈文正本には「不耳」に作れば、之らを合せて「不介耳」と改写したものかと思はれる。而して又、此の外、(75)「於流水之上」(144)「委蛇」なども、釈文正本のみが念仏寺本と合致する例であり、釈文正本によって改写した、とも見えなくはない。が、これらもやはり、古い俗本系にもかく作つてゐたものと言ふべく、釈文正本に由つて改めたのではないらしい。例へば、

(24)「欲與之共已職事之也」

の如きも、宣賢本は「職也」であり、正義疏文中にのみ「職事也」となつてゐて、正義により「事」字を増入したとも見られるものである。が、念仏寺本には、「欲與之共已職事之也」の如くに校合してをり、「之」とは「之」字は或る本には无い、といふのである。然る時、或本には、「之」字がなく、衍増であることには注意しながら、「職事」の「事」字には言及してないのであるから、念仏寺本には元来「之」も「事」も備はつてゐて、異とするに足らなかつたのであらう。即ち此の抄本の祖本は、古くから此の形を相伝してゐた、と考へられ、正義に由つたのではないらしいのである。又(124)「祭礼主婦設羹」も、宣賢本・正義本と同致するもの。然も、これは宣賢本も「祭礼」に作るから、蓋し我國古伝の形を存したものと推すべく、正義に由つたとも言へない。更に、(54)「墓置」の如きは、釈文正本のみにかく作るのであるが、念仏寺本には、「他故又作策」の如く、後から釈文によって校合書入レされてゐる。即ちこの抄本系の祖本に古く相伝された形と想はれるのである。(但しこれなどは、釈文正本に由つて改写されたものを求めるとすれば、その色彩の濃厚なものとは言

へよう。)又(60)「有武力任^ヘ、為^シ將率^シ之德」の如きも、正義本・宣賢本みな「有武力可任^シ」に作って異なり、釈文正本のみが同致であるから、一応、釈文正本に由ったものかとも、見られるものである。が、校合書入レに、「率^本」とあり、「帥」に作り、又その音注のあるのは釈文正本で、之を参考書入レたのであるから、本来、「率」に作ったのが念仏寺本の形であらう。そして「任^シ」には及んでゐないから、これも本来よりかくなつてゐて、釈文正本とは同致なので、問題とするに足らなかつたものと推せる。もし釈文正本に由った改写だとすれば、「任^シ」だけでなく、「率」も共に改めたであらう。任^シ為^シ」だけ改めて「率」は「帥」に改めなかつたといふのは、不自然である。故に(60)も、念仏寺本には、もと／＼かやうに作られてゐた形、と想ふ。又(96)「冬至架^之」も、釈文正本にかく作られて同致するものが、之については、阮元校勘記にも論じてゐるが、顔氏匡謬正俗引劉昌宗・周統等本には、「加^之」に作り、「音架」としたらしい。「加」でも「架スル」意味ではあつた。それはともかくも、釈文音注を見るに、「架^之」音嫁、俗本或作加功」といふ。即ち「俗本或作」^之とは、「俗本の中の或るものは加功に作る」の意なるべく、俗本中에서도「架^之」に作つたものは、勿論あつたのであらう。随つて、「架^之」に作るからといって、悉く釈文正本に由つた、とはいへない。此の抄本の(96)「冬至架^之」も、亦その証例で、俗本中の或本で「架^之」に作るものに基いたもの、と推されるのである。

以上の数証によつて、念仏寺本が正義・釈文正本に同致する形のもの、必ずしも正義・釈文正本に由つて、改写されたものではない、元来念仏寺本の祖本からさうなつてゐた古い型が多く、けだし六朝流行の通俗本系乃至釈文正本・正義本に、共通した字句形であつたらうか、と推定されるのである。

(VI) 然る時、此等は、念仏寺本が古い型の一種のものを本具すること

とを、示も事例の一端である、ともいへよう。かくて、念仏寺本の特徴は、六朝通俗本系統の古い型を、原拠として存有してゐる点にあり、その例証は、既述の如き、釈文一本・俗本・崔民集注本等に同致する形を存するものに於て見出せる。

然るに又、念仏寺本の特徴価値は、諸他の伝本には全然存しない字句形をすら具存し、それが必ずしも改変ではなく、むしろ本来固存する形であつて、それにより、六朝通俗本系の形相を、今日に於ても、或る程度まで伺察できる、といふ点にあらう。次に、此の点を若干究明して見たい。

四、

先づ(9)「成教敬」の如きは、宣賢本以下諸本には、みな「孝敬」に作る。従つて、念仏寺本の「教敬」は、誤写ではないか、とも疑はれよう。が、念仏寺本には、「成教敬」とあり、一本には「孝」に作ると校合「書入レ」してゐる。従つて「教敬」に作ることは、念仏寺本本来の形で、之を誤りとも、亦「孝」に作るべきだとも、考へてはゐない様である。又(10)「移風易俗」も、正義本には「移風俗」に作り、唯宣賢本は「移風易俗」に作る。故に、我國古伝の抄本は、かく作つたであらう。釈文正本・一本や俗本その他には、此の条を欠いで不明であるが、蓋し六朝通俗本系には、かく(9)、(10)の如くに作るものがあつて、それを念仏寺本の祖本も伝承し、相伝したもの、と推される。又(18)「哀謂慮中心、恕之無傷善之心、謂好仇也」の如きも、諸本に異なる。而して「慮中心」の慮は、「本无シ」と書入レする。諸本には存しないのであるが、此の抄本には本具したものである。有る方が意味がよく通ずる。従つて、これも誤衍とは見てゐない。やはり我國古伝の六朝通俗本系には、かく作られたと推すべきか。又(32)「因葛之形性以興焉」も、正義本・宣賢本みな「形」字なく、此の抄本にだけあるもの。箋の意が、「女子の形体長大と容色の

美盛とに喩へた」とするに在る以上「形性」^{本元}となつてゐる方が佳であらう。抄本に「形性」と書入レがあるのも、「形性」を誤視せず、異同を記したものであらう。又(36)「曷戸漸及曷否」(50)「樂斯」^{二字本元}(55)「稼之打」(65)「天下和平」(133)「獄訟也」(139)「室家之道不足」(39)「誰女誰無家」なども、やはりそれ、此の抄本の祖本からかくなつてゐたものか。そしてそれは、六朝通俗本系の我国に流入して古伝されたものであらう。念仏寺本は、そのやうな古い一種型を固存し、

南社文学と「詩界革命」

倉田 貞美

今日に髣髴させてくれる特質と価値をそなへてゐる。

五

以上により、大念仏寺本毛伝残卷は、恐らく釈文一本系、特に六朝通俗本(詩正義に所謂俗本)系統を祖本とする古い型を伝存するものか、と推定せられ、随つて釈文正本・正義本等とは別系の伝本と考へられる。そこには、正義本・釈文正本系と異なる古い型の字句相が残見でき、それは亦詩義解釈に少なからず貢献するものがある。

序言

南社は、一九〇九年に柳詒子・陳去病・高天梅などが發起人となつて上海に創設した、清末民初における一つの文学団体であるが、文学上における共同の信条に基いて結成されたものではなく、革命思想を中心として結ばれた文学団体であつた。同人たちは文筆をもつて大いに革命思想を鼓吹したし、多くの者が直接革命運動に参加したのであるが、もとより同じく革命思想とは言つても、「清朝打倒」という当面の目標は一致していたが、必ずしも同じような思想ではなかつた。ともあれ、南社文学は革命家の文学とも言ひ得るものであり、民族的、革命的、浪漫的な特色を有し、辛亥革命時代の時代精神を最も如実に反映した文学であつたと言ふことができる。

この南社の同人たちは、いわゆる「詩界革命」——梁啓超たちが提唱し、黄遵憲などが優れた作品によつて具現した——に對して、いかなる立場をとつたか。「詩界革命」から陳独秀・胡適たちの「文学革

命」への途上において、詩歌革新の上になかなる寄与をなしたか。そうした点を明らかにしてみたいと思ふのである。

一

南社の同人は、發起人の陳去病・高天梅・柳詒子を始め、黄節・諸宗元・馬君武・王毓仁など、多くの者が、同時に国学保存会の会員であつた。殊に黄節・陳去病はその主要なメンバーとして、「国粹学报」上に多くの論説詩文を掲載したし、諸宗元・劉季平・高天梅・吳梅・胡樸安・龐樹柏なども、その作品を発表している。したがつて、「国粹学报略例」(第一期)において示した、「發明国学、保存国粹為宗旨。」とか、「於泰西學術、其有新理精識、足以証明中学者、皆從闡發。」という主張を、一応共通的なものと考えても、必ずしも不当ではないであらう。

彼等がかくの如き態度を執るに至つた理由は、「南越の詩人」黄節が、「國於吾中国者、外族專制之國、而非吾民族之國也。學於吾中国